

とこは未来教育推進助成事業（令和7年度採択事業）

事業成果報告会（報告動画公開）

実施報告書

1. 開催日時 ： 令和8年8月21日（金）～令和8年8月31日（月）
2. 開催方法 ： オンラインによる報告動画の公開（オンデマンド配信）
3. アンケート回答者 ： 16名
4. 事業趣旨：

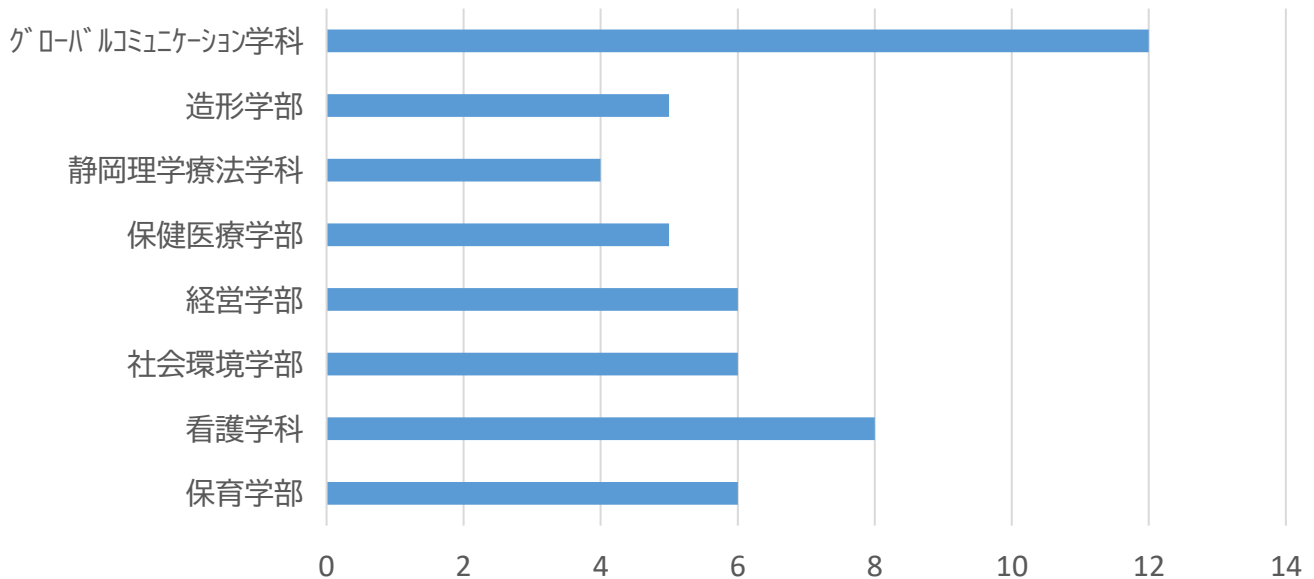
「とこは未来教育推進助成事業」とは、更なる基盤の構築を目指し、学部や学科の特色ある教育の強化や個別最適化に適した学びを推進するための経費支援制度である。本事業を通じて、学生の満足度を高める魅力的な大学づくりを推進する。

5. 事業報告

NO	事業名／事業の概要	事業代表者
1	国際派社会人育成プログラム: beyond the boundaries	グローバル コミュニケーション学科 学科長 崔 慶原 教授
1～3年生を対象とした2段階の国際派社会人育成プログラムである。＜First Step＞では1・2年生の「臨地実習C（海外）」参加費を援助し、学びのスタートアップを促す。＜Second Step＞では2・3年生の語学研修参加や、語学検定上級合格者の受験料を補助し、学習効果を持続させる。		
2	デジタルクリエイティブオンライン講座推進事業	造形学部 学部長 土屋 和男 教授
デジハリのオンライン講座と連携し、高度なデジタルクリエイティブの個別最適化教育を3年間開講する。受講生は自宅で動画を視聴・制作し、プロの添削と学部教員の確認を受ける。成果をコンペ受賞や進路実績に繋げ、募集広報の効果を高めるとともに、将来的な正課授業化の検討や検証を目指す。		
3	デジタルトランスフォーメーション（DX）による 個別教育の推進と学修成果の可視化実現	静岡理学療法学科 学科長 佐藤 友紀 教授
静岡理学療法学科の初年次教育にDXを活用し、教育効果の最大化を図る。コロナ禍以降の質の高い教育や学修者本位の教育を実現する。具体的には、解剖学などの初年次教育を強化し、個々の学生に合わせた学修支援を新規開発する。退学者防止や学修成果の可視化を推進する。		
4	ICTを活用した個別最適化教育による 教育の質的向上を目指す事業	保健医療学部 学部長 矢澤 生 教授
ICTを活用した個別最適化教育を導入し、教育の質的向上を目指す。クラウド型の臨床実習支援システムを取り入れ、5つのアプローチを年次ごとに実施する。教員の負担を抑えつつ効率的な指導を行い、受験者増や退学者低下、国試合格率向上を図る。4年間の事業を通じ、成果のデータ比較と効果測定を定期的に行う。		
5	D X時代における経営人材の育成推進 －産学連携と学生主体のピアサポート・コミュニティによる裾野拡大－	経営学部 学部長 小豆川 裕子 教授
ITパスポート試験合格者を早期に拡大し、実業界で活躍できる人材を育成する取り組み。背景には、民間や自治体でのDX推進に伴う「経営とIT」に強い人材への需要がある。これまでの資格取得支援や産学連携の実績を網羅し、学生主体のピアサポートによる活動の中核に据え、地域DXへの貢献度を高める。		
6	自主ゼミ探求型学習 ～環境・防災・地域の課題への取り組みを通じて～	社会環境学部 学部長 石田 明生 教授
キャリアの多様化を背景に、実践主義・現場重視の教育を行う。学生は自ら問題を見出し、計画を立て、現場での実習や学外機関との協働作業に携わる。最終的な結果発表までのプロセスを通じて、将来の幸せな生活につながる力を涵養するとともに、一連の成果を学部のアピールに活用する。		
7	看護学におけるICTを活用した主体的学修プログラムの構築	看護学科 学科長 千葉 のり子 教授
看護学科1・2年生を対象に、iPadを用いた「基礎看護技術」の新たな授業展開を行う。演習や自主練習時に動画撮影を行い、自身の技術を客観的に振り返るリフレクションや、学生同士の学び合いを促す。体験的・主体的なアクティブラーニングを通じて、看護に必要な知識・技術・態度を効果的に定着させる。		
8	保育現場でリーダー的役割を担う保育者育成に向けた事業	保育学部 学部長 今村 貴幸 教授
質の高いリーダー的保育者を養成するため、現場の求める資質を抽出してカリキュラムに反映させる。学生が県内の保育現場で現職者にインタビュー調査を行い、求められるリーダー像を抽出する。結果を基に学生と教員が共同で検討し、既存科目の改善やカリキュラム再編へ反映させ改革を推進する。		

6. アンケート結果

1) 関心を持った、または応援したいと感じた事業はどれですか？（複数回答可）



2) 選択した事業の関心をもった点や今後の期待、アドバイスがあればご記入ください。

- ・ iPadでの客観的な振り返り
- ・ 臨地実習、交換留学が生徒にとっていい経験になると思った。
- ・ 外国に興味がある高校生に対して、大学で行っている海外交流を1時間でも良いので、オンラインで体験する機会があると、更に海外に興味を持つ生徒が増えるように感じた。
- ・ 大学の先生方が、様々なことに挑戦し、学生のために工夫していることに感動した。
- ・ 学部学科の魅力につながっていると感じる。
- ・ 積極的にICTを活用する点と、今の立場より高い視点で物事を考える姿勢が素晴らしいと思った。「さすが常葉生」と言われるような学生を輩出できるように各学部の取り組みに今後も期待している。
- ・ 保健医療学部の臨地の学生を遠隔で把握、指導できるシステムは大変有効だと思う。看護にも取り入れたい。
- ・ 看護学科の技術学習にICTを活用した事前課題、演習実施は有効だと思う。研究デザインを組み、実証出来たら、さらによいと思う。
- ・ 学部・学科の特色的な取り組みが多く、学生につけさせたい力や課題解決を図るものとなっており、今後の成果に期待したい。
- ・ 当初の計画通りに進まないことも多いと考えられるので、年度ごとに見直し・改善を行い、事業の目的達成につなげてほしい。ICTやDXに関する内容が多いのは時代の要請から当然であるが、学生が持っているスマートフォンを積極的に活用する取り組みがあってもよいのではないかな。
- ・ 個人的に関心のある社会問題に関連が深いものを視聴した。このような事業が行われていることについて、附属校としてももう少し知っておくべきだと思った。

3) 各事業への質問および今後の活動に対するご意見・ご要望等

- ・ 保健医療学部の臨地実習支援システムは看護においても有効だと考えられる。しかし、経費が問題である。事業が終了した後どのように継続されるのか知りたい。
- ・ 令和8年度で最終年度になる事業が多いので、事業終了後にどうするかを検討していただきたい。
- ・ 今後も、事業成果を継続的に蓄積し、また、その内容を共有できる機会をいただきたい。
- ・ 教育、研究、大学運営、地域貢献に関して、時代が求める傾向を絞り、事業補助が計画される状態が継続すると良いと思う。
- ・ 本学の特色的な取り組みとして、外部へもっと発信できるようになればと思う。
- ・ 将来の選択肢が広がったり、将来につながる経験ができる4年間になっていると思う。
- ・ 大学生の傾向と高校生の傾向に共通点があるように思った。附属高校の教員として、高校生のうちに、学びに向かう姿勢や、振り返ることの重要性をもっと伝えたい。